



右/本間が設計した(株)本間組の社員寮。10年前に社員寮を廃止し民間住宅を借り上げていたが、社員間のつながりを深めるために今回再建した。入社1～3年目の若手を中心に生活を共にする。
左/入寮者の交流を促すことを意図し、個室にはリビングからアクセスする。池田企画設計部長も旧社員寮で若手時代を過ごしたという。

私の実績
komachi's point

輝け!

けんせつ小町

意匠設計者

本間真央 (株)本間組新潟本社 建築事業本部企画設計部



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



建物をつくるうえで必要不可欠な設計図面。意匠設計者はユーザーが建物を利用する姿を思い描き、線を引いていく。北前船の交易で発展した新潟に、発注者の思いを巧みに引き出し、建物というカタチにまとめる意匠設計者がいる。建設会社の設計部という特徴を最大限に活かしながら、多種多様な建物の設計に挑戦している。



住宅への関心を育む

本間真央は一九八五（昭和六〇）年、新潟県新潟市に生まれた。賑やかな七人家族だった。「社名と名字が同じなので、家業を継いだの？」と聞かれることもありますが、違うんです（笑）。昨年結婚した夫がたまたま本間姓だったんです。両親とも建設業とは縁がありません。家にはいつも家族の誰かがいて、人の温もりを感じられる家庭でした」
常に人が集い、会話が生まれる環境。とにかく家が好きだったという。そんな本間を、両親は趣味の古民家巡りにしばしば連れ出した。「新潟には江戸時代に北前船の交易で栄えた商家の旧小澤邸や豪農の旧笹川邸、旧伊藤邸など、古民家がいくつも残っています。休みの日になると家族で何度も繰り返し見学に行っていましたね」
家族を身近に感じる家に育ち、新潟のさまざまな古民家に触れるうちに、住宅への関心が自然と高まっていった。いつしか関心は希望へと変わっていき東京の大学で建築学科を専攻したことも自然な流れだった。
「大学では建築のサークルに所属し、授業以外でも建築のことを考えていました。例えば、ある建築家の思想を調べ、その解釈をもとに建物を設計する。一つのテーマに三カ月くらい。

グループに分かれて、案を競い合いました。考えをカタチにすることがすごく楽しかった」
こうした活動に没頭するうちに、意匠設計を生涯の仕事として意識するようになったという。「入学当初は漠然と人が集う住宅に関わる仕事がしたいと思っていましたが、だんだんと設計への気持ちが強くなりました。それと同じくらい新潟が好きで家族の近くで働きたいという想いもあり、(株)本間組に就職しました。いま、その両方を叶えられて、幸せだなと思います」

周囲のフォローが成長を支えた

二〇〇八年に入社後、配属されたのは木造の個人住宅を専門に設計する住宅事業部だった。「当時は図面にどんな情報を書き込むのかわかっていなくて。そんな時、現場の所長から『納まりを指示しないと見積もりから漏れちゃうよ』とアドバイスをもらったことがありました。現場から指摘をもらえて図面の精度を上げられることは、建設会社に所属しているからこそだと思います」
住宅の設計に打ち込むこと五年。忙しい業務の合間を縫って勉強に動かし、一級建築士試験に合格。
「住宅事業部の皆さんがすごくフォローしてくれて。部署内に一級建築士の資格を持っている方も多く、この先年次を重ねるにつれてもっ



私の
仲間
komachi's
point

企画設計部のメンバー。遠藤課長（後列右）は社員寮の計画でも、設計や現場の視点からの確にアドバイスをくれた。

「設計はいろんな人の想いをカタチにしていく仕事」

私の
職場
komachi's
point



自席にて図面を確認する本間。発注者やユーザーから引き出した建物に対する想いが図面に込められている。



上／企画設計部では同期の小嶋さんと隣同士に机を並べる。なんでも相談できる間柄だ。
下／設計を担当した病院の現場。小池所長と仕上がりをチェックする。現場で学ぶノウハウも多い。

と仕事が忙しくなるから、早く取った方がいいぞ、と。個人住宅の設計はお客様が休みの土日に打ち合わせをすることが多いのですが、私は平日に打ち合わせができる案件を担当させてもらえたので、勉強する時間をつくることができました。本当にありがたかったなと思います」

発注者の想いを引き出し、建物というカタチにする

一級建築士の取得と同時期に企画設計部に異動。事務所や店舗など多種多様な建物を扱う部

署だ。ここで住宅の設計との違いに直面する。

「企画設計部の仕事では、ニーズを聞き出すお客様の関係者がすごく多い。いろいろな方に応えながらモノをつくるのが、個人とやり取りする住宅と感覚的に大きく違いました。お客様が心の奥に潜めている本当の想いを引き出すためには、まずは私自身を信頼してもらわないと始まりません。要望を言いやすい雰囲気をつくったり、なんでも話せる関係を築けるようにも心掛けています」

一つの案件に関して、月一回は営業、設計、積算、施工の担当者が集まり、意見を出し合う。建設会社の設計部の特徴がここにある。

「立場によって物事を見る視点が違うので、自分では思ってもいなかった話も出てきて、そこでの知識の共有は刺激になります。みんなでモノをつくっていく、協力し合う姿勢。いろんな人が関わって一つのモノをつくっていくことを肌で感じて、そこがこの業界の面白さでもあるんだろうなと思います」

設計には答えがなかったり、終わりが無いともいわれるが、本間は建物のことを考えていると時間が経つのも忘れてしまうという。

「いつのまにか遅い時間になることも多いです。でもそれは苦勞というわけではなく、楽しい時間なんです。お客様に図面や模型を見てもらい、『ああ、これこれ！』と顔をほころばせていただける時が、すごく嬉しくて」

komachi MEMO

「某テレビ番組でも紹介されていましたが、新潟市内の古町という地区には、江戸時代に北前航路が栄えていたときに生まれた料亭がいまも残っているんですよ。芸妓さんもいます。この間、めったに公開されない建物を見学してきました。もちろん両親とです(笑)」



profile

ほんま・まお◎1985(昭和60)年、新潟県生まれ。建築学科を卒業後、2008年4月、新潟県を地盤に事業を展開する(株)本間組に入社。建築事業本部住宅事業部にて戸建住宅の設計業務を4年半にわたり担当する。2012年10月から同本部企画設計部に所属し、寮や病院、事務所、工場など多岐にわたる建物を設計している。

ナースステーションに設けられたカウンターの形状は、本間が設計でこだわった点の一つ。院内が少しでも優しい印象となるよう、丸く柔らかなカーブを描いた。

経験したことのない建物に チャレンジし続けたい

本間が手掛けてきた建物は住宅や寮、事務所、病院、工場など多岐にわたる。未経験の用途の建物を設計することに戸惑いはないのだろうか。

「当社には経験豊かな先輩が多く、疑問にも答えてもらえるから不安はありません。むしろ、今まで扱ったことのない建物にこれからもっとチャレンジしたい。新たに覚えなければならぬことはたくさん出てくるけれど、それは学ぶチャンスでもあります。この一年は病院を担当していました。この一年は病院を担当していましたが、病院の設計もなかなかできるものではありません。ここで得たお客様のニーズから吸収することも多く、またそれが別のところでも活かせるんだろうなと思います」

病院の増築工事は九月末で竣工したが、引き続き年末に竣工予定の改修工事にも携わる。並行して食品工場や企画営業案件の設計も進む。

「もちろん設計のプレッシャーは感じます。自分が描いた線が実際の建物になりますから。でも、私一人でつくっているわけではありません。社内の部署の垣根を超えて『いい建物をつくろう』という同じ目標を持った仲間がいるからできるんです」

そう笑顔で話す本間の言葉の端々に、設計に掛ける熱意と、一緒にモノづくりに取り組む仲間への信頼が込められていた。